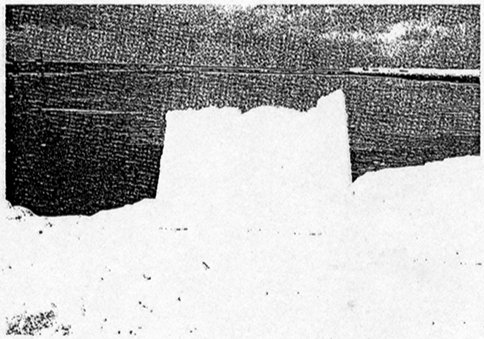
青森という空間、作家と、とけあう。

仙北谷 羊

注目のプロジェクト、青森市の「青森市芸術創作工房」の開館プレイベントとして今年の十月に開催されたPUDDLES「水辺」。アメリカ、ベルギー、ドイツ、オランダそして日本から12のアーティストやグループが招かれ、作品制作やパフォーマンスを行った。

アーティスト・イン・レジデンス（AIR）の最初の試行事業ということで、各展示会場を回ってみた。青森市街の西衡器で展示されていたオランダのジャン・マルク・スパーンズは長時間露光したカメラの前で発光管を動かすことによって、光跡を様々な形に映し込んで作品にしている。まるで光のウエディングドレスや階段が不思議な浮遊感に見える写真作品。アーティスト・トークのときに作家と話していたら、これまで、スタジオなどの室内で、こうした一連の作品を制作していたが、青森に来て初めて、屋外で制作したのだと言う。完成した作品は、カラフルな美しい光の円舞、そしてその背景には、月明かりや森のシルエットの奥に青森市街の夜景が写り込む。作品に青森の空気が入り込み、作品表現に、豊かな広がりをもたらしている。アーティストが街にやって来て、ある時間暮らすというAIR。その土地がアーティストにもたらす影響はとても大きいし、スパーンズの作品は、明快に青森という空間が作家にもたらした変化を表現していた。

ところで青森駅前の大衆食堂に参加アーティストたちとなだれこみ、狭い店内に英語、ドイツ語、日本語、津軽弁が入り乱れ、一瞬にして無国籍な状態になるというのも、AIRの醍醐味。ここで出会ったカミール・フェルシュフーレンは、世界中の文字を集めるアーティスト。雲谷の公民館分館の一室を文字の図書館に見立てて展示した。雲谷に展示されていた日本語の手書きの言葉は、作家自身が、日本語を写し書いたものだという。私は自分の手帳を出して、私の漢字のサインを写してよ、と頼むとまるでそれが母国語であるかのように書いてしまう。彼は日本語も分からないのに私より漢字を書くのがうまいかも。しかも小さな文字は左手で、大きな文字は右手でとスイッチする。特殊能力を編集なしで体験！作家とゆっくり話せるレジデンスならではというのを実感した。



去年秋、一年ほど前の当フォーラムでも書いたトヨタアートマネジメント講座青森のシンポジウム・テーマだった「青森港中央埠頭県営2号上屋」は、今回の主要な展示、パフォーマンス、そしてシンポジウムの会場として活用された（ちょっと寒かったけど）。ここで行われたモレキュラーシアター初の青森公演「Legend of Ho」。一ステージ四十人限定。狭い部屋に押し込められた観客は吊革につかまって豊島重之の仕掛けた劇空間へと誘われる。意表を突く演出は、花屋敷のビックリハウスのごとく観客の平衡感覚を奪い、詩的言語の中を漂う。まさに「水辺」の倉庫は、まるでモレキュラーのためにあるかのように、美しい陰影を湛えていた。